

時には「抜け駆け」の気概で



静岡市にゆかりがあり、東京を拠点に内外で活躍する皆様に、東京から見た静岡市の良さと可能性、まちづくりの方向について、ご提案いただきます。

アートにも力

大手ビールメーカーに勤めていた1985年、しりあがり寿のペンネームで描いた単行本「エレキな春」で漫画家デビュー。その後、同社を退社し独立。「漫画家は子ども頃の夢でしたね。ただ大学時代はマンガだけでなく、コマーシャルフィルムとか、イラストみたいな絵を使って人を喜ばせるエンターテインメントの世界に憧れていました」という。

東日本大震災直後、自ら被災地に入って描き上げた「あの日からのマンガ」は当時の人々の心理などをリアルに描き大きな反響を呼んだ。「サラリーマン時代は消費者が欲しいものを第一に考えていました。独立後は自分の描きたいことを描くということをも大切にしています」。

当初はギャグマンガが中心だったが、最近では時事ネタや墨絵インスタレーションなどのアート作品や、アニメーション映像などを手がけ活動の幅を広げている。

東京より世界を相手に

2014年に紫綬褒章を受章した。「力のある人は他にいっぱいいるのに恥ずかしいですね。控えめなところがいかにも静岡人らしい。02年4月から朝日新聞夕刊に4コマ漫画「地球防衛家のヒトビト」を連載中。

静岡側に求めたい点はいろいろあるようだ。一つは、「えげつなくても生き残るみたいな、危機感が足りない気がしますね。人を陥れるという言葉が悪いですけど、われ先に抜け駆けすると、協調路線ばかりじゃなくてもいいと思うんです」。

「あまり冒険できなかった自分の反省」を踏まえ、「これからは東京云々というより恐らく世界を相手にしていかないといけないでしょうから、東京を超えて欲しいというか、静岡にいてもいいですから世界一の何かをやつて欲しいですね。東京へ出て、東京に合わせて喜んでるんじゃないかって、もうちょっとその先を見て欲しい気がします」と話す。

静岡の魅力は「やっぱりおでんとか、プラモデルですかね」。その上で、「世界に誇れるおでんのまちで頑張るのもいい」と語る。「例えば、世界おでん選手権(仮称)を静岡市で開くとか、ですね。世界中の煮物を集めるみたいな。たとえ、地味でも世界一になれば、そこそこお客さんが来ると思っています」。

漫画家

しりあがり寿さん

Shiriagari Kotobuki



経歴

静岡市葵区生まれ。県立静岡高校卒業。多摩美術大学(グラフィックデザイン専攻)卒業。1981年、キリンビール株式会社に入社。94年退社し、漫画家として本格活動に入る。59歳。
代表作に「真夜中の弥次さん喜多さん」、「あの日からのマンガ」。昨年夏から今春まで東京など全国3カ所ですべて日常品から美術作品までさまざまなものが回転するユニークな「回転展」を開催し注目を集めた。NHKなど多くのTV番組に出演。現在、神戸芸術工科大学教授、横浜芸術大学客員教授、常葉大学非常勤講師などを務める。
<http://www.saruhage.com/>

(文:長田義明、写真:しりあがりさん提供)